

私の写真道楽六十年

古谷 昭雄(S30電気)

写真歴60年をふり返り、近年の作品-約100点(All カラーライド)を投射、その作品についての思い出をベースに、趣味写真の楽しさ・面白さ・造詣を解説いただいた。

[講演解説の骨子]

広辞苑には、『道楽とは、道を解^{ふけり}して自ら楽しむ事』と書かれている。一方では、「本職以外の趣味などに耽^{ふけり}り楽しむ，物好き，好事，放蕩…」と広義な解説もある。自分では、前者と思いガンバツて来たが、家人は後者と思っているらしい。

18歳で初めて“二眼レフ”を手にし、次々にカメラを換え（7～8種類）、ライカ判のニコンF2（露出計付き）に到着。この時代、安月給を割いて数々の替えレンズを買い揃えた。自分で、焼き付けまでやり出した。しかし、ここに新しいカメラの世界が開かれた。

“一眼レフ”の誕生である。「ファインダーに写る画面がそのまま撮れる」と言う“銀塩カメラ（フィルムカメラの事を通は言う）”の頂点だ。当時の最新鋭機ニコンF70を手に入れ、それに見合う替えレンズ：120m/mズーム，300m/m望遠，50m/mマクロを次々に揃えて仕舞う。勿論、撮影に使うフィルムはリバーサル（ポジネガで画質が綺麗）である。

もう、これでカメラ道楽も終わりと思った所が、何とデジカメ（デジタル・カメラ）の登場である。「フィルム代，現像代不要。その場で、撮った写真が見られる」この魅力（経済性，利便性）には勝てない。仕方なく、デジカメD70を買って仕舞う。

しかし、“銀塩党”がそう安々と“デジカメ党”に転向は出来ない。現在も頑固に“銀塩党”を死守している。（因みに、現在中央電気倶楽部写真部員20人は殆どデジカメに転向して仕舞い、“未だに銀塩党”は数名である。）日常の記録写真はD70となったが、作品はリバーサルフィルムによるF70で通している。

此処で、20年に亘る中央電気倶楽部写真部（第二の人生で、大阪・曾根崎の宇治電ビルに来たとき入れて頂く）からの御願いを!写真部のご指導を頂いている笹田先生は全日本写真連盟（日写連）の大先生です。（今年の新年号の会報に、先生の奈良の写真が載って居りました）先生のお言葉として、「写真をやるなら俳句をやりなさい!」があります。撮影ポイントの設定，作品の題名決定に、五・七・五の句作りは役に立ちます。また、先生は、日写連の中で数少ないデジカメ理解者です。『デジカメなら撮れるが銀塩では…?』という方も気楽に写真部に入れます。皆様も入部されて、ご一緒に、写真ライフを楽しみませんか？

（写真部委員長）



「桜島噴火」(筆者作品の紹介例)

【謝辞と弁明】： 写真集作成に当たり、お世話になった方々へ

先ずは、中央電気倶楽部でご指導頂いた 故・中森三弥先生（全日本写真連盟関西本部）及び笹田金吾先生（全日本写真連盟関西本部），そして、中央電気倶楽部写真部の歴代委員長：高濱 様，須山哲夫様，総務グループの草木良一様他写真部員の皆様に厚く御礼申し上げます。

次に、審査会への作品提出に当たって、懇切なるご示唆を頂いた 大阪のキタオカメラ店の北嚶社長，明石の銀座カメラ店の森田尚先生，そして各種写真の現像，焼き付け，引き伸ばしを御願ひして来た神戸・垂水のキングカメラ店，大阪の堂島ナニワ店及び明石の谷上写真店へ謝辞を申し上げます。

ここで弁明を

私の写真道楽は、「自分は撮るだけ。後はオンブにダッコで、皆様に支えられて作品を作り上げ」，結果を「写真クラブの例会に提出，そこで上位に選ばれたものを引き伸ばして、公募展に応募」といった厚かましいやり方でした。

今回(2010年)作った写真集はそういったものの集積です。

最後に、この度の写真集作成に当たりましては、明石の写真家：氏平様に適切なご示唆を頂き、その編集・製本には交友プランニングセンターの皆様大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。

出典：古谷昭雄-筆 「写真道楽六十年」＝ 会員バトン随想
中央電気倶楽部会報：2010年6月号より転載